

監修者の辻三蔵さんから

札幌記念の調教パターン

について原稿を頂戴しましたので、

メンバーの皆様へ

お送りさせていただきます。

---

◇調教マスター（札幌記念）

---

昨年の札幌記念（8月23日G2、札幌芝2000m）はフランスG1の凱旋門賞に出走したハープスター、ゴールドシップが1、2着を独占。凱旋門賞の前哨戦として注目を集めており、今年も1次登録をしているルージュバック（今年のオークス2着）が参戦予定だったが、調整中に熱発を発症したため出走回避。本命視されていたルージュバックの離脱により、混戦ムードが漂っている。

昨年の菊花賞馬トーハウジャッカル、前年のエリザベス女王杯を制したラキシスが当面の主要候補。両馬ともに宝塚記念以来の実戦になるが、10年以降、宝塚記念出走組は〔2-2-1-1〕（勝率33%、複勝率83%）の好成績を残している。その内、トーセンジョーダン（11年1着）、ロジュニヴァース（10年2着）は放牧先のノーザンファーム早来でジックリ乗り込み、レースから2週前に札幌競馬場に入厩。両馬共に追い切り本数は2本と少ないが、札幌ダートコースの直前調教では〔6F78秒台-5F63秒台-4F50秒台-1F12秒台〕の猛時計を出している。調教施設が整っていない競馬場の調整では牧場での乗り込み量が重要になる。ダートコースの直前追い切りで速い時計が出せるのは放牧先での調整が進み、体調が整っている証拠だ。

トーハウジャッカルは8月8日に放牧先の加藤ステーブルから札幌競馬場に入厩。12日（水）のダートコースで1週前追い切りを行ったが、強めの調教はこの1本だけ（調教時計：6F84秒2-5F67秒6-1F12秒5）。19日（水）の直前追い切りはスクーリングも兼ねて芝コースで行う予定。右前脚の爪を傷めた影響で長期休養を強いられたことから脚元に気を遣いながら調整を進めている。牧場での運動量も加味しても仕上がりに疑問は残る。

ラキシスは放牧先のノーザンファーム天栄から7月31日に函館競馬場に入厩。函館ウッドコース中心に調教本数を4本乗り込んでいるが、全体的にセーブ気味の調整なのが気になる。飼い食いが細く、繊細な性格を考えれば、福島県のノーザンファーム天栄から函館競馬場への長距離輸送が応えているのだろう。また、ノーザンファーム天栄は猛暑の影響もあるので牧場での乗り込みが進んでいない可能性はある。体力面で見劣る部分があるからこそ、入厩後も攻め切れないジレンマはある。

角居厩舎は4月5日の大阪杯（ラキシス）を勝った後、JRA重賞競走では〔0-1-0-20〕（連対率5%）と凡走が続いている。厩舎自体に勢いはなく、調教でも積極性を欠いているのが残念だ。